

# 研究構想

学校教育目標 **夢と志を持ち、共に高め合う児童の育成**

育成を目指す資質・能力

- ・課題発見・解決力
- ・思考力・判断力・表現力
- ・主体性

〈めざす子ども像〉

- ① 自ら考え、行動する子
- ② 学び合い、表現する子
- ③ 郷土を愛する子

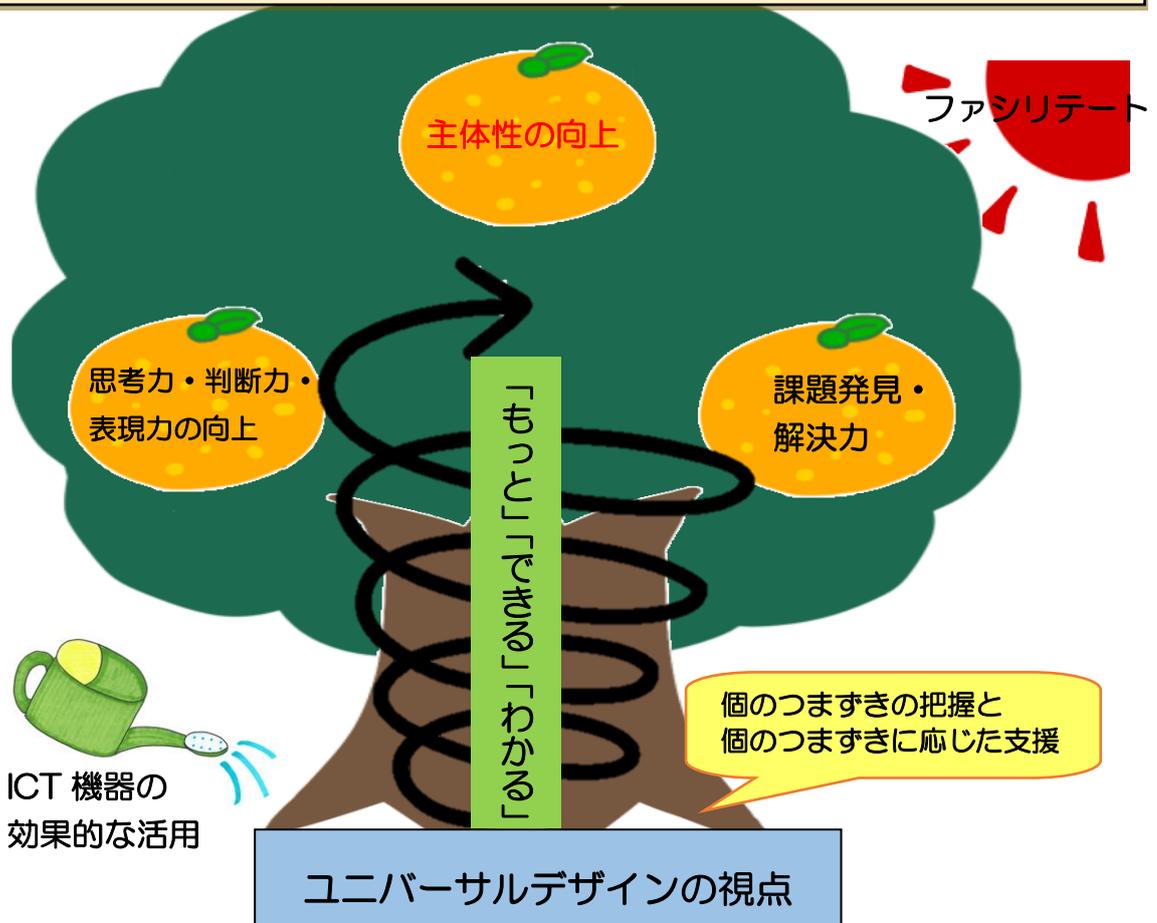
地域や保護者の願い

- ・基礎学力の充実
- ・豊かな心
- ・健やかな体と体力
- ・強い心

〈小・中連携〉  
二中学区小中連携

研究主題 **「わかる」「できる」「もっと」を引き出す授業の創造**  
～ユニバーサルデザインの視点を取り入れて～

研究仮説 ユニバーサルデザインの視点を取り入れて、個のつまずきの解消に向けた支援を工夫・改善することで、児童は、「わかる」「できる」「もっと（～したい）」を実感し、本校で目指す資質・能力の向上や主体的・協働的に学び続けることができるであろう。



基礎学力の定着～校内検定の実施、フォローアップの工夫、読み上げシートの活用等～

伝え合う活動の充実

振り返り活動の充実

学級経営（あたたかく・認め合う学習集団づくり）

# 研究の概要

【研究テーマ】	「わかる」「できる」「もっと」を引き出す授業の創造 ～ユニバーサルデザインの視点を取り入れて～
【目指す成果】	<ul style="list-style-type: none"> <li>本校で育てたい資質・能力（課題発見・解決力、思考力・判断力・表現力、主体性）の向上</li> <li>授業改善を通じた学力、学習意欲の向上</li> </ul>
【成果指標】	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童、教職員アンケートでの肯定的評価の割合（80%以上）</li> <li>学力調査等の結果（現状数値以上）</li> <li>単元末テスト（国語科・算数科・理科）の結果（正答率80%以上）</li> <li>Q-U2回目の一次支援・学習意欲の数値向上（全学級で1回目以上）</li> </ul>

## 【主題設定の理由】

### NRTの結果

		2年	3年	4年	5年	6年	全体
国語	前年度結果 偏差値平均		43		45.4	52	46.8
	本年度結果 偏差値平均	49	38.8		50.8	49.7	47.1
算数	前年度結果 偏差値平均		45		48.2	54.3	49.2
	本年度結果 偏差値平均	53	42.4		53.8	56.6	51.5
理科	前年度結果 偏差値平均				51.4	51.7	51.6
	本年度結果 偏差値平均				57.2	52.1	54.7
全体	前年度結果 偏差値平均		44		48.3	52.7	48.3
	本年度結果 偏差値平均	51	40.6		53.9	52.8	49.6

### 資質・能力、Q-U アンケート

	4月	12月
主体性	95.0 (%)	85.7 (%)
思考力・判断力	80.0 (%)	83.4 (%)
表現力	85.8 (%)	85.8 (%)
Q-u 学習意欲	9.3 (点)	9.5 (点)
一次支援 の数値	85.2 (%)	76.0 (%)

### 単元末テスト 正答率

教科	観点	年度初め (%)	年度終わり (%)
国語科	知識・技能	81.9	93.7
	思考力・判断力・表現力	87.5	87.6
算数科	知識・技能	88.1	80.0
	思考力・判断力・表現力	83.1	75.7
理科	知識・技能	86.8	86.3
	思考力・判断力・表現力	83.0	72.8
計		85.1	82.7

### 全国学力・学習状況調査 正答率平均

教科	国語	算数
前年度結果 (対県比)	66 (-1)	63 (-1)
本年度結果 (対県比)	71 (+2)	65 (+1)

### 単元末テスト（国語科・算数科・理科） 期待得点（80点）以上の児童の割合（80%以上）

教科	年度初め (%)	年度終わり (%)
国語科	81.0	71.4
算数科	71.4	52.4
理科	71.4	66.7
計	74.6	63.5

昨年度まで算数科を中心に研究を進めてきた。NRT偏差値と全国学力・学習状況調査正答率の平均点が、どちらも全ての教科で前年度より上がっていた。しかし、単元末テストでは、算数科・理科の思考力・判断力・表現力の項目で、80%を下回っていた。また、単元末テストでの期待得点（80点）以上の児童の割合（80%以上）では、どの教科でも80%を大きく下回り、個の学力差が大きく見られることやつまずきに応じた更なる指導の工夫が必要であることが分かった。また、児童アンケートでは、どの資質・能力の項目も肯定的評価が80%以上と高かった。しかし、実際の児童の実態として、自分の考えを相手に伝えるように表現したり、自分から進んで粘り強く取り組んだりすることが難しいという課題がある。

## 【研究概要】

### 1 研究仮説

ユニバーサルデザインの視点を取り入れて、個のつまずきの解消に向けた支援を工夫・改善することで、児童は、「わかる」「できる」「もっと（～したい）」を実感し、本校で目指す資質能力の向上や主体的・協働的に学び続けることができるであろう。

### 2 研究内容

#### （1）個のつまずきの把握と個に応じた支援

児童の実態やつまずき等を把握するとともに、児童一人一人の「分かった」「できた」という達成感を重視した個別の学習支援を実施することが大切である。そのために、NRT や Q-U、単元末テスト等の結果を基に、学年・個の実態やつまずきを校内研修で共有し、それに応じた支援をユニバーサルデザインの視点を取り入れて行き、PDCA サイクルを回して改善していきけるようにする。

また、授業では、以下3つの視点を重点的に行い、児童の「わかる」「できる」「もっと」を引き出すようにしていく。

- **単元構想**：児童の実態に応じたゴールを設定し（させ）、児童と共有することで、児童は見通しをもって学ぶことができる。
- **課題設定**：日常生活と関連付けた提示、問いや驚きの生まれる提示、既習事項との関連に気づく提示等、児童の、「どうして」「やってみたい」「できそうかも」等の気持ちを引き出す課題設定の工夫を行うことで、設定したゴールに向けて問いが繋がる授業づくりを行っていく。
- **課題解決スキル**：課題解決をするための学び方のスキル（「問題を把握する」「既習事項と関連させて、問題解決の方法を見通す」「課題（問い）を設定する」「答えを導き出す」「情報や友達の考えを整理分析する」「まとめる」「振り返る」）の定着を図ることで、児童主体となって取り組めるようにしていく。

#### （2）研究を支える取組

##### • 基礎学力の定着

- ①読み上げシート：算数科の読み上げシート1分間チャレンジを通して、自己の成長を実感できるようにするとともに、基礎学力や情報処理能力、集中力等を高められるようにする。
- ②フォローアップの工夫：児童の実態に応じた課題を計画的に実施する。
- ③検定の実施：校内検定（漢字・算数・理科）を計画的に行うことで、目標に向けて取り組めるようにする。

• **伝え合う活動の充実**：自分の考えと根拠を明確にした表現の場を設定したり、全校児童や地域の方等に表現する機会を意図的に設けたりすることで、相手意識・目的意識を持って伝えられるようにしていく。

• **振り返り活動の充実**：自己の振り返りを大切にし、自己や仲間の成長や課題を実感しながら自己を見つめてみがかく力の向上を図るようにする。そのために、「R80」を活用し、本時で分かったこと（内容）だけでなく、どのように今までの知識を活用して考えたか（方法）や、自己の学び方について振り返ることができるようにし、次につながるようにする。

• **あたたかく・認め合う学習集団づくり**：自分達で学び合い、高め合っていくには、集団作りが欠かせない。学びの土台として、学級活動を中心に、まずは安心して言い合える関係を築く。そして、目的意識や課題意識を高めていけるように、校内で研修を行い、教員のファシリテートのスキルを高めていく。